

佐世保市令和元年度「保幼小連携接続カリキュラム」(平成 24 年度版) アンケート調査に関する報告書

門田理世 (西南学院大学)

沖本悠生 (九州産業大学) 諫山裕美子 (久留米大学) 角田一枝 (西南学院大学大学院生)

佐世保市幼児教育センター

1. はじめに

本報告書は「保幼小連携接続カリキュラム」(平成 24 年度版)に関するアンケート調査結果を報告するものである。

佐世保市は、平成 22 年度から全市的な保幼小連携のシステム化を図り、平成 24 年度に佐世保市の幼児教育センターが事務局となり、佐世保市保育会、佐世保市私立幼稚園協会、佐世保市小学校長会等との協議を通して「保幼小連携接続カリキュラム」(以下、接続カリキュラム)を作成し、市内全施設へ配布している。導入から令和元年度までで 7 年が経過し、現在その改訂に向けて各団体等と議論を重ねているところである。そこで、平成 24 年度版の活用実態、活用における保育者や教員の意識を把握し、改訂版の方向性を検討することを目的として、佐世保市幼児教育センターと協議の上、接続カリキュラムに関するアンケートを作成し、調査を行った。以下、アンケート調査を行った分析結果について、アンケート回答者の属性、接続カリキュラムに対する親和度、接続カリキュラムの活用場面と目的、接続カリキュラムの見直しへの意識の 4 点から報告をする。

2. アンケート調査の概要

【調査対象】

平成 30 年度保幼小連携担当会 (平成 31 年 1 月開催) の参加者

- ・小学校 1 年生の担任教員 (校長・教頭等も含む)
- ・幼稚園、保育所、認定こども園の年長児担任 (園長・主任等も含む)

【アンケート調査項目】

表 1 アンケート調査項目

I 属性	性別、年齢、担当職務、保幼小連携担当経験
II 接続カリキュラムの親和度	保幼小連携接続カリキュラム (平成 24 年度作成) を知っているか 接続カリキュラムに目を通した経験 接続カリキュラムを活用した経験 接続カリキュラムを活用しての感想 ダウンロードができることを知っているか否か 等
III 接続カリキュラムの 3つの柱・見直しに関する意識	「かかわる力」は自園・自校の子どもたちの姿と合っているか 「生活する力」は自園・自校の子どもたちの姿と合っているか 「学ぶ力」は自園・自校の子どもたちの姿と合っているか 「3つの柱」を見直す必要性・その理由 接続カリキュラムを見直す必要性・その理由

【アンケート回収率】

表 2 アンケート回収率

	全施設数	担当者会参加者 ^{※1}	回答数 ^{※2}	回収率
乳幼児教育施設 (幼)	102	160	147	91.8%
小学校 (小)	45	65	60	92.3%
計	147	225	207	92.0%

^{※1} 複数日程で参加した学校 (参加者) を含む

^{※2} 担当者会の後日に FAX で提出された回答も含む

3. 結果

I アンケート回答者の属性

※以下、表やグラフの表記は乳幼児教育施設を「幼」、小学校を「小」、乳幼児教育施設と小学校と合わせた回答全体を「全」とする。

1) 回答者の年代と今年度担当職

担当者会の出席者のうち、アンケート回答者で、乳幼児教育施設は20代・30代・40代の年代が2〜3割とばらつきがあり、小学校は50代が最も多く65.0% (図2)であった。その回答者の担当職は、乳幼児教育施設では年長組担任が61.9% (図3)、小学校は1年生担任が70.0% (図4)と最も多かった。

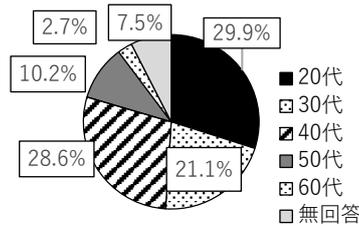


図1 回答者の年代 (幼)

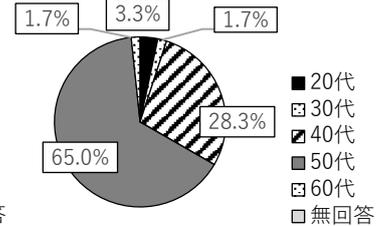


図2 回答者の年代 (小)

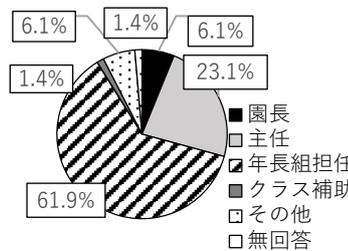


図3 今年度の担当職 (幼)

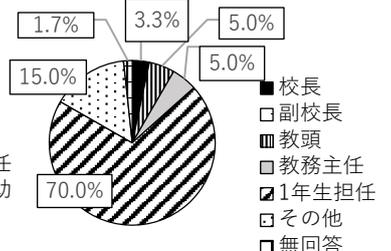


図4 今年度の担当職 (小)

2) 保幼小連携担当

どちらの施設種も保幼小連携担当者は7割強である (図5・6) 一方で、連携担当者ではない2〜3割の方も保幼小連携担当者会に出席していることが明らかとなった。

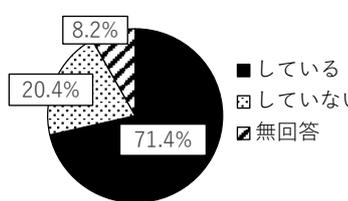


図5 保幼小連携担当 (幼)

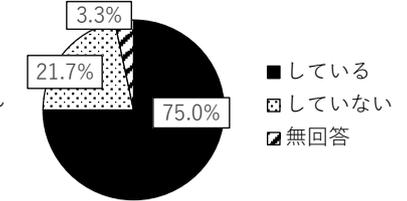


図6 保幼小連携担当 (小)

II 接続カリキュラムに対する親和度

1) 接続カリキュラムの認知度

接続カリキュラムを知っているか尋ねたところ (図7)、全体で91.3%が知っていると答えていた。また、接続カリキュラムに目を通したことがある回答者は全体で87.4%であった (図8)。よって、接続カリキュラムの認知度は高いことがわかる。

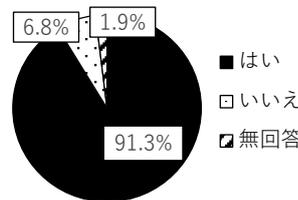


図7 接続カリキュラムの認知 (全)

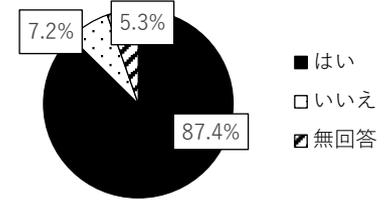


図8 接続カリキュラムを読んだ経験 (全)

2) 接続カリキュラムの活用度

接続カリキュラムを活用したことがあるか尋ねると、乳幼児教育施設が66.7% (図9)、小学校が45.0% (図10)であり、9割を超えた認知度と比較して大きく低下した。接続カリキュラムを認知したり、目を通したりしたことがあっても、カリキュラムの活用に関しては十分ではない実態が明らかとなった。

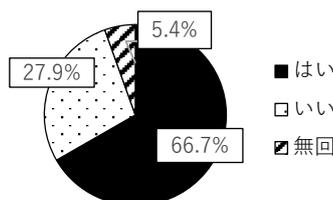


図9 活用の有無 (幼)

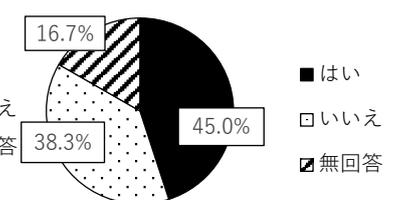


図10 活用の有無 (小)

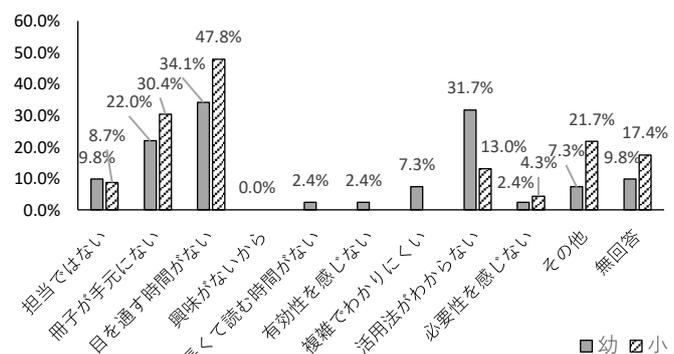


図11 活用したことがない理由 (幼・小)

由は「目を通す時間がない」であった。乳幼児教育施設では次いで「活用法がわからない」が多く、施行から7年経っていても、その内容理解や活用法の把握が不十分であることが明らかとなった。ここから、物理的時間の確保、内容や分量の検討、存在の周知徹底や具体的な活用の手立て等、カリキュラム活用を促進するための具体的な工夫が求められる。

一方で、接続カリキュラムを活用したことがあると答えた6割の回答者は、全員が活用してよかったと肯定的な回答をしており（表3・図12）、否定的な回答は見られなかった。つまり、接続カリキュラムを活用した保育者・教諭は、接続カリキュラムは活用をすればその良さを実感しているといえる。活用に満足感を抱く理由として、接続カリキュラムが保育や指導の参考になったり、活用できたりしただけではなく、保育・指導のポイントを理解したり、自身の知りたいことや疑問点を確認したりすることができるという点が挙げられた。また、小学校側からは「就学前の子どもの育ちや姿の理解」が最も多く上げられた。以上より、接続カリキュラムが自身の接続期の保育や教育への参考・確認、ポイントを理解したりするひとつの羅針盤として機能している現状が示唆された。

表3 活用しての感想

	幼	小	計
大変よかった	24	5	29
よかった	70	21	91
あまりよくなかった	0	0	0
よくなかった	0	0	0
無回答	4	1	5

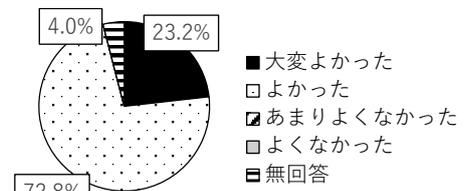


図12 活用しての感想 (全)

III 接続カリキュラムの活用場面と活用目的

接続カリキュラムを活用したことがあると答えた回答者（幼；98名、小；27名）に、それぞれどのような場面や目的で活用したのかについて尋ねた。

1) 接続カリキュラムの活用場面

表4 活用した場面（複数回答可）

	幼	小
日々の保育・授業	48	6
交流活動	32	18
就学前・入学当初	60	17
園内研修・校内研修	22	0
園外研修・校外研修	17	4
幼児教育センターの研修会（幼）	47	
その他の研修会（小）		1
保護者会	10	3
その他	1	0
無回答	2	1

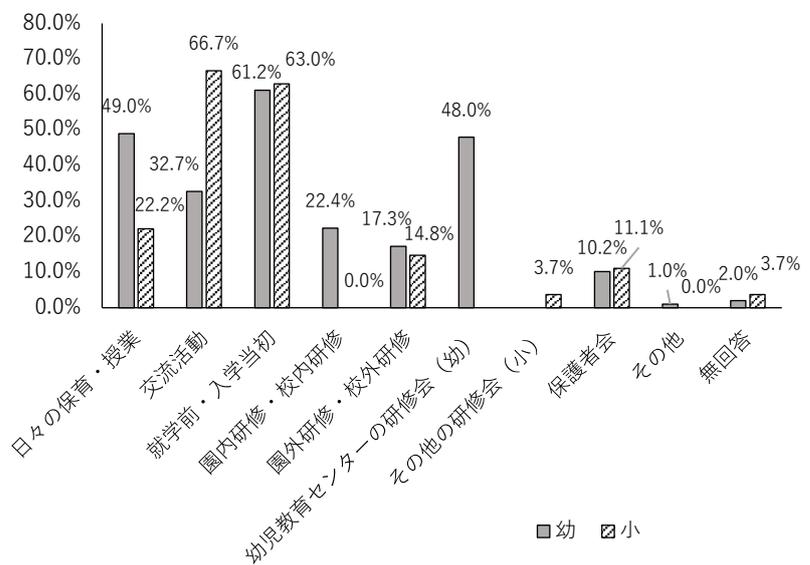


図13 活用した場面 (幼・小)

乳幼児教育施設では、「日々の保育」、「就学前」、「幼児教育センターの研修会」、「交流活動」等と、様々な機会に接続カリキュラムを日常的に活用している実態が伺える結果であった。小学校は「交流活動」や「入学当初」場面での活用が多く、限定的な場面での活用が多い結果となった。

また、小学校が校内研修の場面に接続カリキュラムを全く活用していないという結果が明らかとなった。このことから、接続カリキュラムは接続期を担当する教員のみが使用するツールであり、小学校全体での教育活動や研修には用いられていない可能性が示唆された。

2) 接続カリキュラムの活用目的

表5 活用の目的（複数回答可）

	幼	小
接続期の子どもの発達	60	11
気になる子どもの発達	24	5
交流活動の計画	34	16
日々の保育計画・指導計画	39	8
園内研修・研修会の資料	20	2
園外研修・校外研修の資料	23	3
幼児教育センターの研修会	40	
保護者への説明	16	3
その他	0	0
無回答	4	1

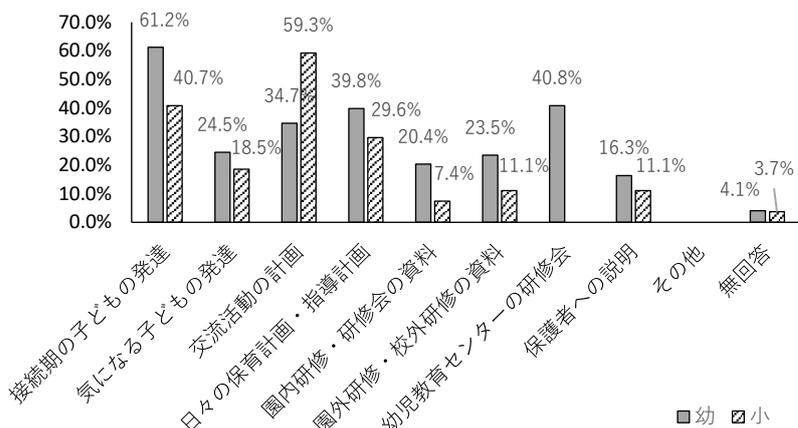


図14 活用の目的（幼・小）

活用した目的において活用度の多かった項目は、乳幼児教育施設、小学校ともに「接続期の子どもの発達」（幼 61.2%・小 40.7%）、「交流活動の計画」（幼 34.7%・小 59.3%）、「日々の保育計画・授業計画」（幼 39.8%・小 29.6%）であった。その中で、乳幼児教育施設で最も多かったのは「接続期の子どもの発達」であり、小学校で最も多かったのは「交流活動の計画」であった。活動場面の結果と合わせ、小学校では、接続カリキュラムを「交流活動」において多く活用しているという特徴が見受けられる。

IV 接続カリキュラムの見直しに関する意識

1) 接続カリキュラムの見直しの必要性と見直しに向けた課題点について

接続カリキュラムの見直しが必要かどうかを尋ねたところ（図 15）、見直しをした方がよいと答えた回答者は全体の約 1 割で少数であった。その一方で、見直しに関して「どちらとも言えない」と中立的な意見を述べた回答者は 4 割であった。ここで、それぞれの項目を選択した理由について詳述する（表 6）。

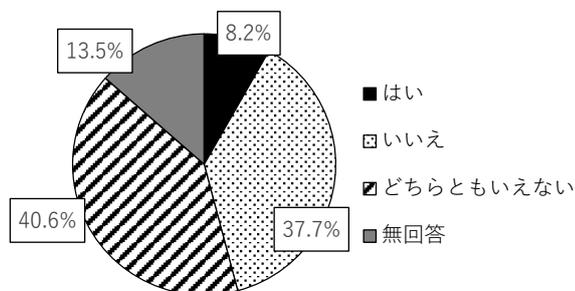


図15 接続カリキュラムの見直しの是非（全）

表6 今後カリキュラムを見直した方がよいとその理由

見直しの必要性	カテゴリー	幼	小
必要	内容における課題	11	11
	内容における課題	10	3
	活用の仕方における課題	4	4
	自身の内容把握の不十分さ	3	5
	カリキュラムの全体的な満足感	2	
必要なし	内容の満足感	8	8
	活用のしやすさ	5	1
	今後の活用への意識	3	1
	カリキュラムの全体的な満足感	2	
	その他		2

「見直した方がよい」8.3%：乳幼児教育施設、小学校ともに「改訂に伴い検討した方がよい」、「10の姿を盛り込んだ方がよいと思う」など、改訂に伴うカリキュラムの検討の必要性を述べる[内容における課題]を挙げていた。

「見直さなくてよい」37.3%：カリキュラムの内容の明確性・具体的・適切性による[内容の満足感]を抱いていたたり、カリキュラムを活用できる現状による[活用のしやすさ]を感じていたたり、「現状で十分」という[カリキュラムの全体的な満足感]を抱いたりしていることがわかった。

「どちらでもない」40.7%：カリキュラムの見直しに中立的な意見を持つ回答の理由としては、カリキュラムへの課題に関する項目が多く挙げられていた。特に、乳幼児教育施設、小学校ともに多数挙げられた[自身の内容把握の不十分さ]では、「児童の姿は把握できているが、幼児の姿については十分把握

できていないので、適当かよくわからない。」、「まだすべてを熟読したわけではないので…」という回答が見られ、カリキュラムの内容の一部は把握しているが全体の把握までには至っていない現状が垣間見え、カリキュラムに精通していないためにカリキュラムの見直しの是非を述べることができないことがうかがえた。

上記の回答の中から出てきた接続カリキュラムの課題として、改訂に伴う検討の必要性や接続カリキュラムの活かし方の検討の必要性が挙げられた。よって、カリキュラムを見直すと同時に、見直したカリキュラムをどう活かしていくかを検討していく必要がある。

4. まとめと今後の課題

本調査より、接続カリキュラムの活用の実態と、そこから接続カリキュラムの改訂に向けた課題が明らかとなった。まず活用の実態では、接続カリキュラムを活用したほぼすべての回答者が、接続カリキュラムに満足感を抱いていたことが明らかとなった。その理由を探ると、「接続カリキュラムが、接続期の保育・教育の計画・立案をし、実践時の確認やポイントを理解したりする等、保育者や教諭にとっての「羅針盤的役割」を果たしていることが示唆された。

一方で、接続カリキュラムの認知度の高さに比べて、活用は十分ではない実態も明らかとなった。このことより、佐世保市として、接続カリキュラムを乳幼児教育施設、小学校の双方がどのように活用していくのか、見直したカリキュラムの活かし方を検討する必要性が示唆された。今後接続カリキュラムの改訂後には、行政が小学校・乳幼児教育施設の接続に寄与する役割を担い、活用に関する手立てを伝える研修を行うことが肝要である。

また、乳幼児教育施設と小学校での接続カリキュラムの活用の特徴を見ると、乳幼児教育施設においては、接続カリキュラムを日常的に活用し、「接続期の子どもの発達」を理解する目的で活用されていた。小学校においては、「交流活動」での計画や場面で多く活用されている一方で、「校内研修」の場面で接続カリキュラムを全く活用していない現状があるなど、それぞれの施設に活用法の違いがみられた。今後は、接続カリキュラムが各学校・施設においてどのように用いられているのかを共通理解した上で、活用の方法を探っていくことが望ましい。

そもそも各教育・保育施設の代表者が協働して作成し自治体が発行した接続カリキュラムはガイドラインであり、そのガイドラインを根底に、各地域、各学校、各園における保育・教育の理念や目標を反映させて独自のカリキュラムを作成するものである。そのため、佐世保市で提案されている接続カリキュラムも各教育・保育施設において、子どもの姿から各学校・園の独自のカリキュラムを立てる際に活用するガイドラインであるという接続カリキュラムそのものの役割を再確認する必要がある。

さらに、接続カリキュラムの課題について問うた設問に対し、カリキュラムそのものの評価ではなく、自身の教育・保育の評価や子どもの姿への振り返りを行っている回答が多く見られた。つまり、接続カリキュラムは教育・保育の羅針盤としての機能を果たすだけでなく、その省察を行うための指標としての役割をもつ可能性も示唆された。

小学校と乳幼児教育施設でカリキュラムそのものの役割を共通理解することに加え、接続カリキュラムが子どもの育ちにとって羅針盤的役割を担うものであることから、各学校・園のカリキュラムの中に、接続カリキュラムを位置付けるという意識を喚起し、改訂後の活用に関する手立てを伝える研修を含め、今後、佐世保市が保幼小連携事業をどのように取り組んでいくのか工夫が求められる。

以上